
女装生活 ～学園と寮との2重生活～

タママ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女装生活 ～学園と寮との2重生活～

【Nコード】

N1267M

【作者名】

タママ

【あらすじ】

生まれつき不思議な力を持っている如月一刀、だがその力を人のために使えば人々から恐れられ、追放される。

ならば人と付き合わなければいい、友達を作らなければ、失うことはないから……

そう思っていた一刀が転校した学園で起こる事件や心やさしい寮のメンバーによって一刀の心情は少しずつ変化していく……

……もう一度だけ、人を信じることができたら……

プログラマー

「なんでこんなことに・・・」

一人部屋の中で頭を抱えて唸っている男がいた。

――きさらぎかずと
如月一刀この物語の主人公である。――

彼は普段は普通の高校に通う一般男子学生だが、彼には生まれつき持っている不思議な力があつた。闇を討つ力、人々の傷を癒す力、人の能力を増強させる力など、彼自身が自分のもっている能力についてすべてを把握できていないほど、彼には力があつた。

だがそれは、周りの人間からすればただの脅威でしかなかった。

いくら彼が人のために力を使おうと、異常なまでの彼の身体能力をみた人間は彼を恐れて

仲間を集めて彼を追放しようとする。助けてもらったことなど忘れ、ただ自分から遠ざけるように彼を追いつ込むことしかしなかった。

・ ・ ・ たとえそれが、彼とどれだけ仲の良かった友達だったとしても。

それから彼は人とふれあうことを極力避け、できるだけ一人でいるよう心がけた。

その方が自分の力がばれた時に悲しい思いをしないで済むから、友達を作らなければ失うことはないから。そう自分に言い聞かせながら生きてきた。

これから話すのはそんな彼が何度目になるかわからない転校した先の学園で起きた物語である。

プロローグ（後書き）

初めての投稿です、友達に「女装」と「主人公が不思議な能力をもってる」の二つを含めた小説を書くと言われたのがきっかけです。更新は遅くなるかもしれませんがゆっくりとお付き合いしていただけると光栄です

校長にだまされて・・・（前書き）

まず最初にいっておきます。女装といっても主人公が好き好んでやるわけではありません。それだけは頭に入れておいてください。初めての作品なのでとても変な小説になるかもしれませんがとにかくやっていきたいと思えます。

校長にだまされて・・・

数時間前・・・

一刀は新しく通うことになった学園の校長室にいた。

校長「君が明日からこの学園に通うことになった一刀君だね。都会の方から来た君には少々不便かもしれないが、田舎には田舎なりのいいところがあるからね。なれてくれば君にとって都会よりも住み心地のいい場所になるはずだよ。なんたってここには海がある、それに山だつてすぐ近くにある、美しい自然に囲まれた素晴らしい場所だと私は思っている」

一刀「はあ・・・」

さつきから校長が妙にそわそわした感じでこの町のいい所を紹介している。今ちようど5回目の海と山の紹介を聞いたところだ。

そろそろ同じ話ばかりされるのも辛くなってきたので単刀直入に聞くことにした。

一刀「で、俺の住む場所はどこになるんですか？」

校長はその言葉を聞くと急に動きが止まり、とても焦っているようだった。

一刀は組織に拾われてから、組織の方に住まいを提供してもらっていたのだが、どうしても組織の用意する家は薄暗い場所や路地裏の分かりにくい場所が多かった。

組織としては秘密がばれないように、ということだったのだがさすがにそれは住み心地が悪いので、今回の転校で全寮制の学校に転校することにした。

そして校長が男子寮を空けていてくれるということで場所を聞きに来たのだが・・・

校長「それが・・・ね、男子寮あかなかったんだよね・・・」

一刀「え？」

校長「転校するはずだった生徒がやっぱり残ることになって部屋が

空かなかったんだよ」

校長がすまなさそうな顔で言った。

一刀「それじゃ、俺の住む場所はとうなるんですか？」

今回は田舎の方の学園なので近くにマンションなどは一切ないし、かといって組織に準備してもらうのもさすがに時間がかかってしまふ、となると野宿しか・・・でもさすがにそれはつらいので何とかならないか校長に聞いてみた。

校長「・・・そうだね、一つだけ手はあるんだが・・・」

その言葉を聞いて一刀は安心した。この際野宿でなければどんな汚い場所でもいいと思っていたので、その方法を頼ることにした。

校長「とりあえずこの紙に書いてある所へ行ってみてくれ、詳しいことはその寮長に聞けばいい」

一刀「わかりました。それでは、失礼します」

一刀は扉を閉めると紙を確認した。

「町 地区――寮」

なぜか――の部分だけ黒いマジックで塗りつぶしてあったが場所には分かったので早速行くことにした。

一刀「・・・で、ここら辺にあるはずなんだが」

紙に書いてあった場所に行くと建物が数件立っているだけで、あとは商店街の方へ続く道ぐらいしかなかった。

だが男子寮は見当たらず、あるとすれば女子寮のような建物だけだった。

一刀「おかしいな・・・このあたりのはずなんだが」

もう一度あたりを見渡すと一人の女の子がいたので聞いてみることにした。

一刀「すみません、このあたりに男子寮があるって聞いてきたんですけど・・・」

そういつて校長からもらった紙を見せると女の子が驚いた顔をしてこっちを見た。

??「ああ、君が話の・・・うん、顔もきれいだし体の方も毛がほとんどないから大丈夫そうね。あとは・・・大丈夫みたいね。」いきなり顔や体を確認し始めたので驚いているとその女の子が手をひっぱり

??「ついてきて、寮長のところに連れて行つてあげる。」

そういうと女子寮の方へ走り始めた。

一刀「つてちよつと待て、俺は男子寮の方に行きたいんだ、女子寮の方じゃないぞ」

そういうと女の子は不思議そうな顔をして

??「あら？校長先生から何も聞いてないの？あなたがこれから住むのはこの女子寮よ」

・・・え？

??「大丈夫、ちゃんと女装すれば女の子に見えるから、心配しなくていいわ」

つまり俺に女装をしろと言うのか？冗談じゃない、そんなことするぐらいなら野宿をした方がましだ。

一刀は手を振りほどこうとしたが女だとは思えないほどの力で引つ張られ、結局流されるまま女子寮の中へ連れていかれた。

寮長「おーそいつが今日から入る奴か、なかなかいい顔してるじゃないか」

一刀「えーと・・・とりあえず帰らせてもらつていいですか？」

寮長「だめだ。今日からお前はこの寮にすむんだ、男なら普通は喜ぶような場面じゃないか」

一刀「喜びませんよ！何よりばれたら・・・」

??「その点に関しては大丈夫よ、私もばれないで1年以上ここに住んでるんだし」

一刀「あなたはばれなくても俺は・・・つて今なんて？」

??「私も女装がばれないで一年以上住んでるわよ？」

一刀「えーと、つまりあなたは・・・」

??「正真正銘男、なんなら証拠見せてあげようか？」

一刀「・・・・・・」

寮長「ま、そういうことだ、いわば女装のプロフェッショナルだからな、そいつに任せとけば問題ない。」

??「そうそう、危なくなったら私がフォローするし、安心していいわよ?」

一刀「いやそういう問題じゃなくて・・・」

寮長「あーもう面倒なやつだな!杏樹!さっさと女装させちまえ!」

杏樹「はい」

一刀「ちよつとまで、俺の意見はー!」

寮長「無視!」

一刀「ぎゃー・・・」

・・・・・・

杏樹「はい、完了!」

一刀「うう・・・」

一刀は仕方なく鏡をみた。もしもその姿がばればれな女装であればすぐにでも女装を解いて逃げようと思っていたからだ。だが鏡に映っている自分の姿はどこから見ても女にしか見えない完ぺきな女装だった。

寮長「おお、なかなかにあってんじゃねーか、それだと普通に行けそうだな。それじゃ杏樹、後はまかせた!」

杏樹「はい、それじゃ・・・えーと名前まだ聞いてなかったわね、君の名前は?」

一刀「一刀、漢字の一刀とかいてかずや」

杏樹「私は安樹、漢字は読者には分かってるから気にしないでいいわ」

一刀「読者・・・?」

杏樹「それより今からこの女子寮で過ごすためのルールを教えてあげる、ちゃんと聞いていてね?」

杏樹が言ったルールは簡単に言うところな感じだった

- 1、お風呂やシャワーは各自の部屋にあるからそれを使う
- 2、女子寮にいる間は常に女装をしておくこと
- 3、学校に空き教室を作ってもらっているからそこで着替えて教室に行くこと

そのあと寮長に交渉が続けたが結局しばらくの間女子寮に住み、それでも嫌なら出て行ってもいい、と言われ、仕方なくここに住むことになった。

一刀「はあ・・・」

自分の部屋のベッドに座りため息をつく。

一刀「なんでこんなことに・・・」

こんなことになるのであればおとなしく組織の用意した家で我慢しておくべきだったと後悔していた。

一刀「なっちゃんったものは仕方がない、とにかくばれないように気をつけないと・・・」

そついうとゆっくりとベットに寝ころび、明日のために睡眠をとることにした。

校長にだまされて・・・（後書き）

ほとんどノリで書きちゃいました。感想を頂けると嬉しいです。とくに「良かった」や「面白かった」ではなく「ここがダメ」「面白くない」などの方が作者は喜びます。純粹に感じた感想をお待ちしております。

次の投稿はある程度頭の中でできてるのでできるだけ早めにした
と思います。見てくださっている方のためにも頑張りますよ（、・
・、）

男としての学園生活（前書き）

転校して間もない時期にやってくる組織からの連絡、その仕事の途中で起こる事件でいろいろな関係が変化していく・・・

さて、今回から少しシリアスな場面も増えてきます。作者はあまりシリアスな場面は書かないので、雰囲気ぶち壊しな箇所もあるかと思いますが、それが作者の特徴だと思って読んでもらえれば、と思います。

男としての学園生活

一刀「今日からこの学園に通うことになりました如月一刀です。よろしく願います」

あまり目立たないよう、できる限り普通の学生らしく挨拶をする。担任「それじゃ、奥の空いてる所に座って」

言われた通り誰も座っていない机へ向かう。そのあといろいろと連絡事項を話した後担任は教室から出て行った。そして恒例の転校生に対する質問攻めが始まった。

さすがに今まで何度も転校してきただけあって質問攻めにも動じずに答えられるようになっていた。

一刀（初めてのころはボロが出ないか不安で仕方なかったのにな・・・）

しばらく質問に答えているときいきなり周りの人達が遠ざかった。どうやら誰かを避けているらしい。

慎二「やあ、初めまして僕は慎二っていうんだ。ダーリンって呼んでくれればいいよ」

一刀「・・・なるほど」

すぐに周りの人達が遠ざかった理由を理解した。どうやらこいつが原因らしい。

慎二「どうしたんだい？そんなに僕の顔を見つめて、もしかして僕のことを好きになったのかい？」

一刀「好きになんかなるはずないしむしろ嫌いになった。それにお前の顔を見つめてもいない」

慎二「そんな照れなくてもいいんだよ別に、むしろ大歓迎さ！」

良く考えるとこいつがいればあまり人と関わらずに済むか・・・

一刀「そうか、なら俺の半径10m以内に入らなければずっと近くにいてくれても構わない」

慎二「それって近くにいけないよね・・・」

「刀」さて、授業の準備をするかな」

そういつて授業の準備をし始めると慎二はちょうど10m位離れた場所まで行つてこちらを見つめ始めた。正直とても気持ち悪い、おかげで周りの人はいなくなつたが。

そして昼休み、一人で食堂に行こうとすると4人ぐらいの男子が近寄つてきて一緒に食べにいかないと誘ひに来た。普通なら愛想よくOKする所だが俺はできるだけ一人でいたかったので丁重にお断りすることにした。

だが流石に毎日それをしてしていると周りの人の反応も変わってくる。今までの学園でもそうだった。誘う度に断られていたら最後にはさそうことをやめる。そして俺は一人になれる・・・はずだった。

この学園の生徒は今までとは一味違つていた。俺が誘ひを断つていると今度は食堂で待ち伏せをして同じ席に座るようになった。同じ席に来るな、なんてことも言えないので仕方なく同席で食べることになった。

さらに遊びの誘ひも断り続けていたら今度は俺の帰る時間に合わせて集団で下校するようになっていた。

「一刀（そういえば最後に誰かと一緒に下校とかしたのはいつだったっけな・・・）」

人との関わりを極力避けるようにしていた俺は「誰かと一緒に」なんてことはほとんどなかった。

それが一番悲しまなくて済む方法だと思つていたから、そうしないといつか悲しい思いをしなくちゃいけないから。

「一刀（俺も不思議な力がなかったらこんな風に笑いながら生活を送れたんだろうな・・・）」

だがそれはあり得ない、使わないうで生活することはできるが組織の命令が下ればすぐにでも動かなければならない。そうなればやはり普通の生活はできない。でも・・・

そんなことを思っているといつの間にかクラスメートはいなくなり、自分一人になつていた。

「刀……学園に戻って着替えないとな」
そういうと再び学園へと戻って行った。

女子寮に戻ると寮のメンバーが食事を並べて待っていた。

那美「お疲れさまー、今ご飯いれてくるねー」

そういつてご飯を入れたに行ったのが2年の羽生　那美、女子寮の炊事役であり母親のような存在。

香蓮「ちよつと有希さん！私のおかずをとらないでください！」

そしていま叫んだのが3年の野々宮　香蓮、被服部の部長で結構なお嬢様らしい。

有希「へへーん、取られる方が悪いんだよーだ」

今おかずを口に入れたまま走り回ってるのが1年の三枝　有希、女子寮で唯一の1年であるが、言動や行動はどう考えても年下ではない。

茜「有希、そんなことしてたら那美に怒られるよ？」

鷺沢　茜、女装した主人公、つまり如月一刀である。女子寮での名前。

那美「有希ー？なにしてるのかなー？」

那美は笑顔で有希に迫っている。正直ものすごく怖い。

有希「あーいやーあのーえとですね、香蓮さんがおかずが食べきれないって言うてましたので代わりに食べてあげたといひますかなんというか……」

那美「次やつたらご飯抜きだからね？」

有希「ごめんなさい……」

そういうと有希はおとなく自分の席でご飯を食べ始めた。この寮の中で料理ができるのは那美だけだから逆らうと本当にご飯が食べられなくなる。ある意味寮長より位の高い位置にいるかもしれない茜「ごちそうさまー」

そういうと食器を流し台の方へ持って行ったあと、2階にある自分の部屋へと戻って行った。

一刀「疲れた・・・」

そういつて制服から私服に着替えていると組織から連絡があった。

一刀「また仕事か・・・」

転校して間もないこの時期に仕事があるということはおそらくまたあいつだろう。

そう思いながら携帯をとり、本部からの連絡を聞いた。どうやらあいつが町に出現したらしい。

それだけ聞くとすぐに服を着替え、窓から外に飛び出した。

一刀「頼むから誰もいないでくれよ・・・」

そう願いながらあいつが出現した場所に急いだ。そして願いは叶わなかったことを確認した。

那美「な・・・なにこれ・・・」

そこには人の形をした影と那美が向かい合って立っていた。

一刀「よりによって那美がいるなんて・・・」

ここで那美を助けに入れば今までと同じ、きっと俺は恐れられこの町から追い出されるだろう・・・

せつかくあんなにいい奴らと出会えたのに、また別れなきゃいけないのか。それは嫌だ、短い期間でも俺と一緒に過ごした奴らと別れるのはつらいに決まってる。ならいっそ、那美を助けないでいれば・

助けないで見て見ぬふりをすれば俺はばれないで済む、そうすれば・

・・・

那美「こないで・・・こないでー!」

その声を聞いた瞬間今まで考えていたことを忘れて飛び出していた。

一刀「伏せる! 那美!!」

那美はその声を聞くと頭を抱えてしゃがんだ。そしてその上を通りそのまま影に向かって一撃をくらわせる。

影「グッ・・・!!」

そのまま影は後ろに倒れた。

那美「如月・・・君？」

一刀「大丈夫か？那美」

那美「う・・・うん大丈夫」

一刀「絶対に俺の後ろから離れるな、分かったな」

那美「・・・うん」

さつき倒れた影がゆっくりと起き上がろうとしている。今なら・・・

一刀「天を司る光の聖霊よ、我に力を・・・闇を討つ力をあたえたまえ！」

そういうと影へと向かって光の力をこめた一撃を打ち込む。

影「グッ・・・ガアアアアアアアア！！」

影は叫ぶとそのまま灰になって消えた。

一刀「・・・ふう、もう大丈夫だな」

那美「あの、如月君」

一刀「今は何も言わずに帰ってくれ、明日にでも説明する」

那美「・・・わかった」

そういうと那美は女子寮の方へ帰って行った

一刀「・・・下級兵だな、影もそこまで早く追いついては来れないか・・・」

しばらく周りを確認した後携帯を取り出し組織へ連絡をする。

一刀「こちら一刀、影の討伐を完了した」

組織「了解、今救援部隊がそちらに向かっている。建物などの修理はそちらに任せておけ」

一刀「了解」

携帯を切るとゆっくりと女子寮へ向かっていった。

一刀（明日には俺は町を追い出されるだろうから、今日ぐらいゆっくり休もう・・・）

次の日の朝、一刀は部屋の片づけをしていた。すぐにもこの町を出ていけるように・・・

そして一刀は早めに学校に行き、校長に退学届を出しに行くことに

した。・・・追い出されるより、自分から出て行った方が辛くないから。

そして学園に着いたときに誰かが校門の前に立っているのに気がついていた。

一刀「こんな時間に誰が・・・？」

一刀が近付いていくとそこには那美が立っていた。

那美「あ、おはよう」

一刀「お・・・おはよう」

那美「あの・・・昨日のことなんだけど・・・ちょっといいかな？」

一刀「ああ、教室で話そうか」

そういうと二人は教室へ入って行った。

那美「あの、昨日はありがとう」

一刀は驚いた、今までそんな反応をした人がいなかったから。

一刀「昨日の、見てなかったのか？」

那美「見てなかったって何を？」

一刀「俺の力だよ、影に向かっていった時の」

那美「ああ、見てたよ」

一刀「ならなぜ俺のことを怖がらない？今まで俺の力を知った奴はみんな俺から離れて行った。なぜお前はお礼なんか言うんだ・・・」

那美「たすけてもらったんだもん、お礼を言うのは当然だよ。それに如月君、あの時とってもカッコよかったよ。私を守ってくれたんだもん、怖がるはずないじゃん」

那美は笑顔で答えた。

一刀「羽生・・・」

那美「ごめん、如月君、日直があるから行くね」

そういうと那美は自分の教室まで走って行ってしまった。

一刀「・・・かつこいい・・・か」

そういうと自分の席に座り、クラスメイトが来るまでの数分間、今日くらいは誰かと遊びに行こう、そんなことを考えながらクラスメイトを待っていた。

男としての学園生活（後書き）

さて、ここまでではほとんどノリで書いていましたが次からはほとんど何もないのでどうなっていくかは作者にも分かりません。

できる限り早く書いていこうとは思いますが、どうしても文章がうまく書けないため更新は遅くなるかと思われます。

どうかゆっくりと作者にお付き合いいただければと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1267m/>

女装生活 ～学園と寮との2重生活～

2010年12月13日19時21分発行